

リウマチ性疾患ケア指導記録

指導患者名簿の左
端にある患者番号

2

該当するものすべてに☑してください。

年 代	70 歳代		性 別	☐ 男 ☒ 女	
施設名	ザイダンクリニック		転 帰	☐ 寛 解 ☒ 継続中 ☐ 中 止 ☐ 転 院 ☐ 死 亡	
診断名	RA		最終指導 介 入 日	令和 ○年 3 月	
合併症	間質性肺炎	診療区分	☒ 外 来 ☐ 入 院	職 業	自営業の手伝い
既往歴	☐ 胃十二指腸潰瘍 ☐ 悪性腫瘍 ☐ 糖尿病 ☐ その他	☐ 炎症性背部痛 ☐ 心不全 ☐ 大腸憩室症 ☒ 無し	☐ 結核 ☐ 肝炎 ☐ COPD	家族歴	☒ リウマチ性疾患 ☐ 結核
診 断 罹患関節（腫脹又は圧痛） ☒MCP 関節 ☒手関節 ☐MTP ☒PIP ☐膝関節 ☐その他					
血液の検査 ☒リウマトイド因子陽性 ☒抗 CCP 抗体陽性 ☐抗核抗体陽性 ☒CRP 上昇 ☒赤沈 亢進					
治 療 ：現在および過去の処方（過去の処方については分かる範囲でよい）					
経口 DMARDs ☐ イグラチモド ☐ サラゾスルファピリジン ☒ タクロリムス ☐ ブシラミン ☒ メトトレキサート ☐ その他（ ）			生物学的製剤・JAK 阻害剤・ステロイド剤など ☐ TNF 阻害薬 ☒ IL-6 阻害薬 ☐ T 細胞共刺激阻害薬 ☐ JAK 阻害剤 ☒ 副腎皮質ステロイド ☐ NSAIDs ☐ その他（ ）		
関節手術 ☐ あり （部位・ ）					
ケア及び 指導内容	X 年 12 月に発熱後に関節の腫脹を認め歩行困難となり大学病院へ紹介され RA と診断された。MTX と抗リウマチ薬を開始したが、効果不十分で TCZ 皮下注射を導入した。症状は改善なく、呼吸困難が出現し、MTX による薬剤性肺炎とされ MTX を中止となった。PSL 点滴で投与されたが、多関節炎が悪化し咳が止まらず心配となり、当院へ紹介状も持参せずに受診となった。受診歴や治療歴を確認すると共に、患者が困っていることや不安を聞き担当医と共有した。夜間に咳嗽、呼吸困難になるため不安も大きかった。当院にて胸部レントゲン、CT 検査、心エコー、呼吸機能検査（FVC,DLCO）、6 分間歩行など呼吸機能を評価する検査は説明しながら実施した。RA の悪化に伴う間質性肺炎であると診断、MTX が再開された。前医にて MTX での薬剤性肺炎として説明されていたため、十分に病状や薬剤について、資料を用いて患者の反応を見ながら説明を行い不安の軽減に努めた。MTX を 2mg/週から慎重に投与が開始され、内服管理については、夫の会社で仕事をしながら家事も行っていったため感染予防と共に、活動量を減らし呼吸への負担を軽減するように指導を行った。在宅で Spo2 の測定をし、低下時や呼吸困難時には連絡をするように指導をした。また、大量に青汁などの葉酸を摂取していたため、薬剤の効果に影響があることも伝え、飲用を控えるように説明した。受診時には、診察前に呼吸状態、バイタルサインや自覚症状の聴取などから呼吸状態を把握し担当医に報告し、情報の共有に努めた。その後、治療を強化し MTX=12mg、Tac=3mg、TCZ=162mg/週まで増量し、多関節炎は軽減呼吸状態は改善された。徒歩にて家族の介助もなく、通院治療を継続し仕事も継続することができている。				
備 考	無し				

※略語（病名・薬物名）の扱いは、リウマチ性疾患ケア指導患者名簿と同等とします。

※ケア及び指導内容については、文字数を 600 文字から 700 文字で作成してください。フォントサイズは 10.5 を推奨します。

※記載例を十分に参考にしてください。

※上記の赤字によるコメントは、作成の際には消してからご使用ください。

申請者氏名 財団 花子



リウマチ性疾患ケア指導記録

指導患者名簿の左
端にある患者番号

9

該当するものすべてに☑してください。

年 代	40 歳代		性 別	☐ 男 ☒ 女	
施設名	リウマチ財団病院 リウマチ外来		転 帰	☐ 寛 解 ☒ 継続中 ☐ 中 止 ☐ 転 院 ☐ 死 亡	
診断名	RA		最終指導 介 入 日	令和 ○年 9月	
合併症	なし	診療区分	☒ 外 来 ☐ 入 院	職 業	文房具小売店 従業員
既往歴	☐ 胃十二指腸潰瘍 ☐ 炎症性背部痛 ☐ 結核 ☐ 悪性腫瘍 ☐ 心不全 ☐ 肝炎 ☐ 糖尿病 ☐ 大腸憩室症 ☐ COPD ☒ その他(バセドウ病、薬疹) ☐ 無し		家族歴	☐ リウマチ性疾患 ☐ 結核	
診 断 罹患関節（腫脹又は圧痛） ☒ MCP 関節 ☐ PIP ☒ 手関節 ☐ 膝関節 ☒ MTP ☐ その他 血液の検査 ☒ リウマトイド因子陽性 ☒ CRP 上昇 ☒ 抗 CCP 抗体陽性 ☒ 赤沈 亢進 ☐ 抗核抗体陽性					
治 療 ：現在および過去の処方（過去の処方については分かる範囲でよい） 経口 DMARDs ☐ イグラチモド ☐ サラゾスルファピリジン ☐ タクロリムス ☐ ブシラミン ☒ メトトレキサート 6mg/W ☐ その他（ ） 生物学的製剤・JAK 阻害剤・ステロイド剤など ☒ TNF 阻害薬 ☐ IL-6 阻害薬 ☐ T 細胞共刺激阻害薬 ☐ JAK 阻害剤 ☐ 副腎皮質ステロイド ☒ NSAIDs 疼痛時のみ ☒ その他（ チラージン S 100μg/日 ） 関節手術 ☐ あり （部位・ ）					
ケア及び 指導内容	3 年前に RA を診断された。MTX とステロイドで疾患活動性をコントロールしてきたが、令和×年に関節痛が悪化、DAS28（CRP）>5.1 となり、生物学的製剤（ETN）導入の適応と判断された。しかし患者は、副作用が怖いと、治療薬の変更に同意しなかった。そこで、1) 患者の不安を聴く、2) 治療選択に必要な情報を提供、3) RA に伴う体の変化を患者自身が気付けるように支援した。 支援の結果、患者はこれまでの治療について「もっと良くなったと思った」と、効果に満足していないことや、RA より前にバセドウ病の治療をうけていたことを語った。具体的には、抗甲状腺薬で蕁麻疹を発症、アイソトープ治療を受けたが、体調が急激に変化（集中できない、下肢がむくむ）した。RA も治療を変えたら体調が悪化するのではないかと語った。そこで、アイソトープ治療後の体調変化は、甲状腺ホルモンを適切に管理すれば緩和する症状であることを伝え、チラージンを飲み忘れないことや定期受診の必要性を伝えた。また生物学的製剤（ETN）の副作用については、薬剤師と協同して具体的な症状を伝えて、セルフモニタリングの方法を指導した。さらに、患者と関節に触れ、血液検査データの推移を確認するなど体の変化を確認し、治療変更の必要性に気付けるようかかわった。患者は ETN 導入を決断でき、導入 4 週目には自己注射へ移行した。疾患活動性は ETN 導入後 3 カ月で DAS28（CRP）<2.1 へ改善している。				
備 考	自己注射移行後も、電話で自己注射に関する問い合わせがある。患者の疑問や不安の内容、支援方法については、外来看護師間のカンファレンスで共有している。				

※略語（病名・薬物名）の扱いは、リウマチ性疾患ケア指導患者名簿と同等とします。

※ケア及び指導内容については、文字数を 600 文字から 700 文字で作成してください。フォントサイズは 10.5 を推奨します。

※記載例を十分に参考にしてください。

※上記の赤字によるコメントは、作成の際には消してからご使用ください。

申請者氏名 財団 花子